

彙報

○早稲田大学史学会・連続講演会

「わたしと歴史学、わたしと考古学」

(於文学学術院校舎)

第一回 二〇一二年六月二二日(金)

中世史料にふれて―中央と地方の関係を考

える 大澤 泉(日本史)

シリアの地方都市からイスラームの改革を

考える 杉本 悠子(アジア史)

「イズム」を問い直すこと

大溪 太郎(西洋史)

中近東でのフィールドワーク

赤司 千恵(考古学)

第二回 二〇一二年六月二七日(水)

外国史としての日本史が持つ魅力

鄭 淳一(日本史)

中国史のえがきかた―士大夫たちの地方統

治 小二田 章(アジア史)

石に刻まれたローマ史

福山 佑子(西洋史)

縄文を掘る

平原 信崇(考古学)

趣旨と経過

村井誠人

早稲田大学史学会「恒例」の「わたしと歴史学、わたしと考古学」と題した連続講演会が、若手研究者八人によって六月二二日(金)、二七日(水)に行なわれた。ここで「恒例」の「若手研究者」による「連続講演会」と記したものの、連続講演会発足時を知る者として、その変化には感慨深いものがある。

二〇〇一年に史学系専修への進級者減少の危機感から一年生に史学系学問への関心と呼び起こそうという思惑のもと、その時点ですでにその後を見越して毎年「連続」していく講演会を企画した。その年の講演会の題目が「早稲田で歴史を学ぶということ」、翌年の「私が歴史を学びはじめた頃」で、そこには一年生の参加もあり、出だしはまずまずであったが、とくに私たち教員及び大学院生諸氏にとっても、本学史学系

の来歴・「長老」的先輩教員の「学問事初め」に接することができ、講演最後の質疑も教員同士のものが当然展開され、喜ばしいものであった。ところが、「第二回」講演会に平常授業の振り替えて「出席」した一年生の中に、「年の離れた」教員たちの話が「学問への誘い」とは感じられず、自分たちの人生の長さをはるかに超える「遠い過去」の「思い出話」としてしか響かなかったことを、講演後に回収されたレポートに記す者がいた。

二〇〇三年六月、第三回目にして、前回までの反省をもとに「わたしと歴史学、わたしと考古学」と題して、「各専修二名ずつの若手の研究者が、それぞれの専攻する学問との関わりを自身の体験を中心にざっくりばらんに語るという形式」(竹本友子『史観』第一四九冊、九一頁)で、現在の形につながっていく「連続講演会」が実現した。すなわち、本形式の講演会は、本年十周年を迎えたことになる。

さて、本年、筆者が担当する文化構想学

部必修基礎演習のクラスで本講演会への出席を学生に諮ったところ賛意を得、二二日の講演会に履修学生の参加をみた。文学部

史学系コースに進む学生たちに比べ全般的に歴史的関心が薄いと感じられる文化構想学部所属学生が、聴講後のレポート内ではとんど異口同音的に次のように記していた。歴史学へのきっかけが、大澤泉氏のお話のように、きわめて身近の「少女の関心」に所在していることへの驚きと同感、杉本悠子氏の歴史的シリアに誘ってくれた人との縁と積極的行動が生み出す彼の地での人間関係の機微への感動、大溪太郎氏の明快な論理性を、演習に際しての「プレゼン」の理想として「学習」、赤司千恵氏の「外見に勝る積極性」と学問的執着心に感嘆。まさにそこには、本連続講演会で十年前に意図した年齢的に近い「若手研究者」による講演が、大学入学後の学問的方向を探ろうとする一年生たちに、高校までの「日本史・世界史」の教科が作り出したイメージを払拭し、新たな学問対象としての「史学

系」の存在を提示するには、いまだに有効である——いや今後も有効である——ことが示されているといえよう。

〈第二回〉

中世史料にふれて

—中央と地方の関係を考える

大澤 泉

大学で歴史学を学び十年が過ぎましたが、未だに歴史学に対する確たる考えはありません。しかし今考えていることをそのままお伝えすることで、少しでもお役に立てればと思っています。

私は小さい頃から古典文学を読むのが好きでしたので、次第に歴史小説を読むようになりました。その中でとりわけ印象的だったのが、永井路子の歴史小説でした。私は埼玉県の川越市の出身でしたので、小説に登場する地元の武士、河越重頼に非常に興味を持ちました。それまで歴史は京都

や鎌倉を舞台にしているイメージを持っていました。しかし河越氏の存在を知ったことにより、歴史は自分のすぐ傍にもあって、現在につながっているものだというところに気付いたのです。

その後、永井路子の小説を読み続けると、幾度となく見かける名前がありました。それが日本中世史家の石井進の名前でした。そこで私はすぐに『鎌倉武士の実像』という本を図書館で探しました。この本との出会いが、私の歴史学との出会いと言えるのかもしれません。大学に入ると迷うことなく日本史を専攻し、卒業論文では平安末期に武蔵国で勢力を誇っていた秩父平氏が、鎌倉幕府によってどのように吸収されていたのかを検討しました。

このように私の中で育った地域の歴史への視点は、更に中央の歴史といかなる関連性を持ち、歴史的な展開を遂げるのかという疑問へと発展しました。例えば国という行政単位がありますが、その中心であったのが、「国衙」と呼ばれる官庁です。国衙